

# 洛東江流域の原三国時代墓制と 丹後・但馬地域の弥生時代後期墓制

福島 孝行

## 1. はじめに

筆者は拙稿で丹後（丹波）・但馬地域の墓制に洛東江流域の墓制が影響を与えた可能性を示唆した<sup>(註1)</sup>。しかし具体例を示さなかったため、どのような墓からどのような影響を受けたと考えられるのか、誤解を生んでいるとみられる引用もみられる。そこで具体例を示し、あらためて洛東江流域の墓制と丹後・但馬地域の墓制で共通する点と相違する点を確認し、彼我の影響関係を考察する足掛かりとしたい。なお、洛東江流域の墓制全体を論じる力量は筆者にはないため、管見に入った事例の内、影響の程度が高そうな事例を紹介する。

そこで障害となるのは言語の問題である。半島の墓制に対する理解を深めるのには報告書や論文は欠かせない。そこで、ここで紹介する事例について報告書が日本語訳されているものはそれを引用し、日本語訳されていないものは、筆者が報告書を翻訳したものの一部を掲載する。

## 2. 洛東江流域の事例



第1図 各墳墓位置図(S = 1/50,000,000)

洛東江流域の事例として、昌原茶戸里遺跡の事例と大邱八達洞遺跡の事例を取り上げる。昌原茶戸里遺跡は洛東江下流域右岸に所在し、南西の山塊から貯水池に向かって張り出す舌状の低い台地縁辺部に立地する。畦畔から等高線を推測すると、各墓壙は等高線に直交して造営されている。大邱八達洞遺跡は洛東江中流部の支流琴湖江右岸に立地する函芝山から南西に伸びる尾根上に位置し、周囲の低地から10～25mの比高差がある地点に立地している。各墓壙は等高線に直交して造営することを基本とする。

(1) 昌原茶戸里1号墳<sup>(註2)</sup> (引用)

第三章で説明したように、盗掘されたことから発掘調査前に封土は存在しておらず、墓壙も確認できなかった。墓壙は平面が隅丸長方形で、その規模は長さ278cm・幅136cm、現在の深さ205cmである。墓壙の長軸方向は、ほぼ南東～北西方向で、枕向きは南東枕と推定される。それは、木棺の南東側の幅が若干より広く、棺の内部から出土したガラス玉などが南東側に片寄って発見されたためである。

墓壙の内部に安置された木棺は、長さ240cm・幅85cm・上下65cmの大きさに太い丸太を利用して、製作されたものである。すなわち、直径1m程度の一抱えを越す木を切り出して、これを縦方向に半截した後、それぞれの内部を飼葉桶のように彫り込んで棺の蓋部と身部に使用した。(中略)

墓壙の底面の中央に掘られた、副葬壙に入れてあった棺の下の竹籠は、保存状態が良くなく、正確な形態及び大きさはわからないが、長方形の箱形に蓋があったものと推定される。出土時に竹籠の表面の一部に残った紐の存在から見て、副葬品を入れて紐で縛ったものと見られる。大きさは、およそ長さ65cm・幅55cmで、高さは確かではないが、約12cm程度と推定される。

研究室での調査の結果、この竹籠の中には、次のような遺物が納入されていた。武器類としては、漆塗り鞘銅劍2点・漆塗り鞘鉄劍1点・木製劍把付鉄劍1点・鉄劍片2点・漆塗り鞘鉄製環頭刀子1点・銅鉾1点、鉄鉾4点などがある。利器類としては、鑄造鉄斧6点・木柄付鎌形鉄器2点などが出土した。装身具には、星雲文鏡1点・青銅帶鉤1点・鋸齒文銅環1点、銅環4点などがあり、その他の遺物に、五銖錢3点・小銅鐸1点・漆器の筆5点などがある。

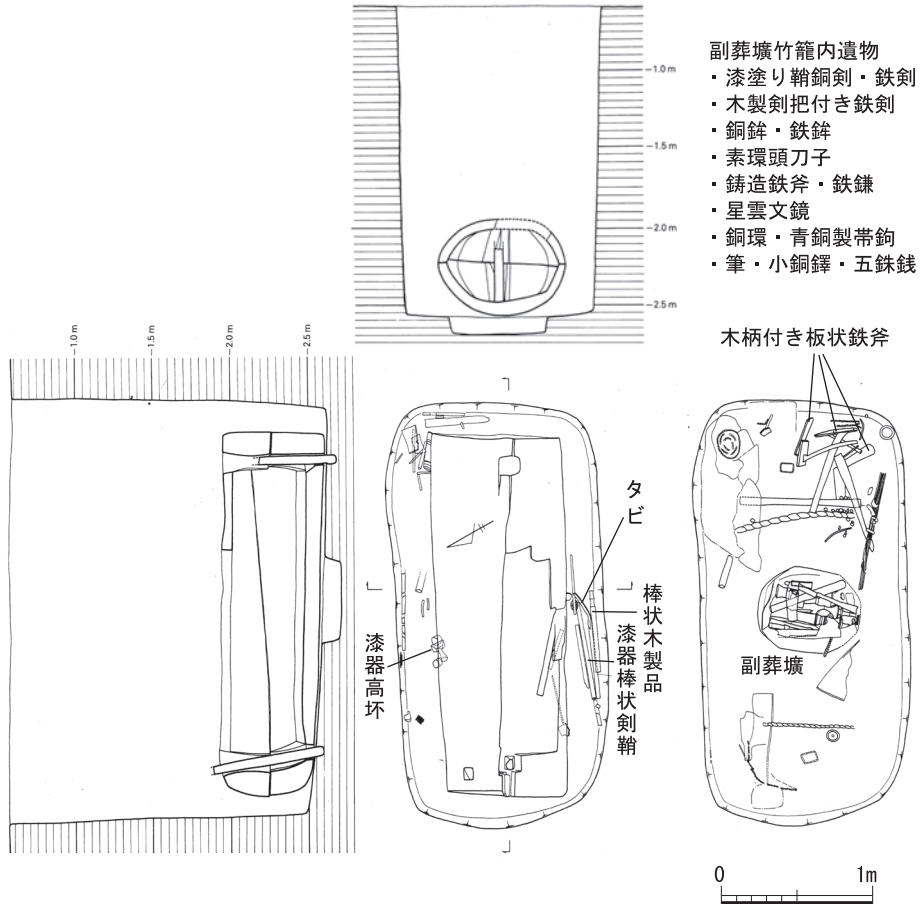
以上のように、この第1号墳では大部分が攪乱されていたが、木棺は完存していた。木棺下の底面に副葬されていた遺物はもとの状態を維持しているが、第三章で言及した内容をもとに、この第1号墳の構造をもう一度要約すると、つぎのようである。まず、墓壙を掘り下げ、壙底中央に設置した長方形の副葬壙に各種の副葬品を納入した竹籠を副葬して、その左右の墓壙底面にも木柄付鉄斧・漆器・栗などの遺物を副葬した後、太い綱を利用し

て木棺を下ろして安置したものと見られる。つぎに、壙壁と木棺の間の空間にも副葬品を配置した後、掘り上げた土で墓壙内部を充填したものと推定される。

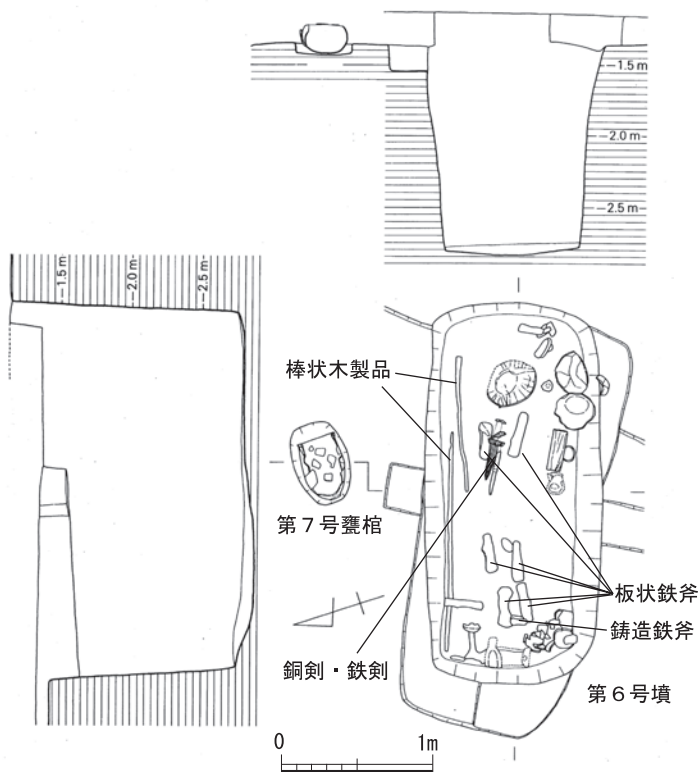
(2) 昌原茶戸里第6号墳 (引用)<sup>(注3)</sup>

長軸方向が東～西に近い木棺墓で、盗掘されていない処女墳である。開墾された水田の耕作により、墓域は確認することができない。墓壙は長さ 260cm、幅 125cm、現在の深さ 150cm の大きさで、平面形態は隅丸長方形である。土壙壁は床面へ下がれば下がるほど幅が少しずつ狭くなる。

遺構の南東隅上に平底の瓦質土器底部 1 点と、胴体下半部のみ残った丸底壺 2 点が正置された状態で置かれてあった。このことから推定してみると、遺構の上部に木蓋のような施設物はなかったようである。遺構内部は暗灰褐色の腐植土で埋まっており、床面には灰青色の粘性のある土が全面に薄く敷かれていた。



第2図 茶戸里第1号墳墓壙平面・断面図(S=1/50)



第3図 茶戸里第6号墳墓墳平面・断面図(1/50)

東短壁の肩線のした125cm付近から長さ180cm・幅80cmの大きさの木棺の範囲を確認することができた。また、木質痕が数個所で確認され、墓の規模と遺物出土状態から見て、木棺を使用したことは明らかである。遺物は、木棺と墓墳壁の間の空間及び木棺内部から出土したが、木棺上部の副葬遺物と推定されるものは、木棺内部から一緒に出土した。墓

墳の幅と床面から出土した銅剣・鉄剣の位置から見て、枕向は東向きと考えられる。墓墳床面からは副葬墳が発見されなかった。

遺物 盗掘がなされていない完形で、遺物の配置状態をよく知ることができた。前述したように、副葬遺物は大きく木棺と土墳壁の間の空間と、木棺の上部及び木棺内部の遺物に分けることができる。韓国式銅剣・鉄剣・ガラス玉および板状鉄斧の一部は、木棺内部から出土し、土器類・漆器類・磨製石斧および板状鉄斧は木棺上部と土墳壁の間の空間に副葬されている。床の中央付近からは小石1個が出土した。北側の長壁に連なって95cm、150cmの大きさの木棒が長軸と平行して置かれていたが、用途はわからない。

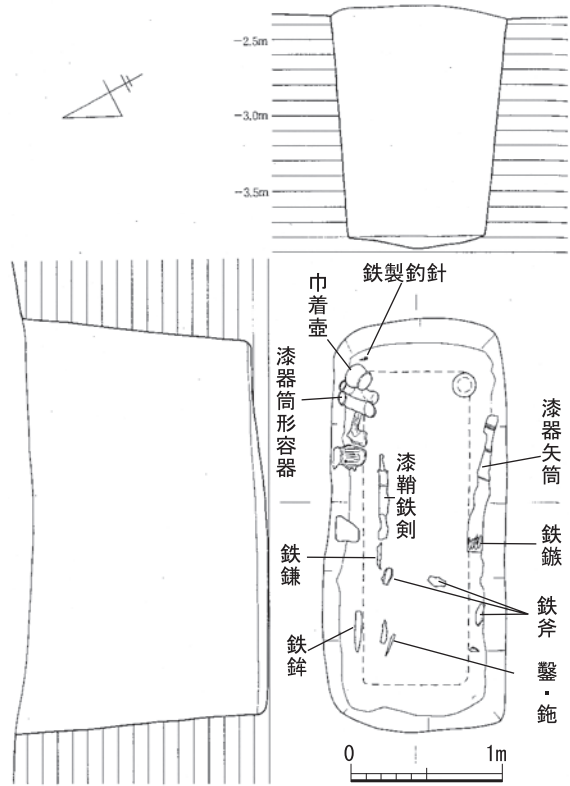
### (3) 昌原茶戸里第32号墳<sup>(注4)</sup> (翻訳)

墓墳の平面形態が隅丸長方形の木棺墓として30号墳の北東側、31号墳の北側方向で発見された。墓墳壁はほぼ垂直に下がるが、深さ150cm程度で段がある。墓墳の長軸方向は、ほぼ東-西に近く、また副葬坑がない類型である。盗掘が甚だしいが遺物は比較的よく残っていた。盗掘坑は、墓墳の範囲とほとんど一致しながら、墓墳の3壁面の一部だけがいくらか盗掘を免れた状態で、西側短壁の両角、被害を受けた部分は生土までえぐられていた。

坑内部では瓦質の短頸壺1個体分が、破損したまま一括で出土した。

墓壇の大きさは、長さ273cmで、中央部の幅は120cmばかりだが、西側に行くほど若干ずつ狭まる。深さは現肩部ラインで底まで約160cm程度で深い方である。枕方向は、南側長壁の漆器矢筒内で出土した鉄鏃と棺内部底で出土した漆鞘鉄剣の出土状態からみたと東枕のものと考えられる。墓壇の輪郭は、現表土層である暗褐色腐食土を深さ20～25cm程度で除去して現れた。

墓壇は、黄褐色粘土層と淡赤褐色砂質土層との境界部分を掘り込んだもので、墓壇底の境界線は、墓壇中央部分で現れた。墓壇内

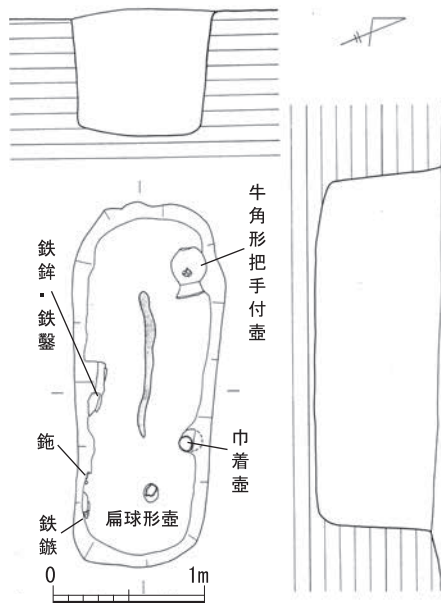


第4図 茶戸里第32号墳墓壇平面・断面図(1/50)

部は墓壇内で掘り出された土が暗褐色・赤褐色・黒褐色（炭粉が混ざっていた）等の粘性が強い腐植泥質で満たしていて、木棺推定輪郭線外部の充填土は黄褐色砂質土に粘土が混ざった腐植土である。現肩部線から120cm程度の深さで木棺の痕跡は現れた。木棺は、完全に腐植して残っていないが、土層と内部の土色等から見ると丸太形態の木棺であるものと推定される。木棺の長さは、206cmと推定せざるを得ないが、墓壇内部がほとんど盗掘され腐食土の堆積状態を把握するしかなくて、最大幅は推定するのが難しい。

副葬品では、墓壇底で漆鞘鉄剣1点、鉄鏃1点、鉄斧2点、鉄鏃1点、鉄鏃1点等が出土し、墓壇と木棺の充填土内では、北側長壁の東側で潰れた漆器筒と蓋1組、有蓋円筒形漆器2組等がしており、北東側角部分では瓦質巾着壺1点と鉄製釣針2点等が出土した。それから南側長壁の東側にはつぶれた漆器矢筒内部で鉄鏃が入ったまま出土しており、西側では、鉄斧1点が出土した。同じく北側長壁の西側に偏って充填土上部で鉄鏃1点が出土した。出土遺物中漆器類の場合木心は全部腐食しているが、漆皮だけは形態を維持して発見された。

(4) 昌原茶戸里第47号墳<sup>(注5)</sup> (翻訳)



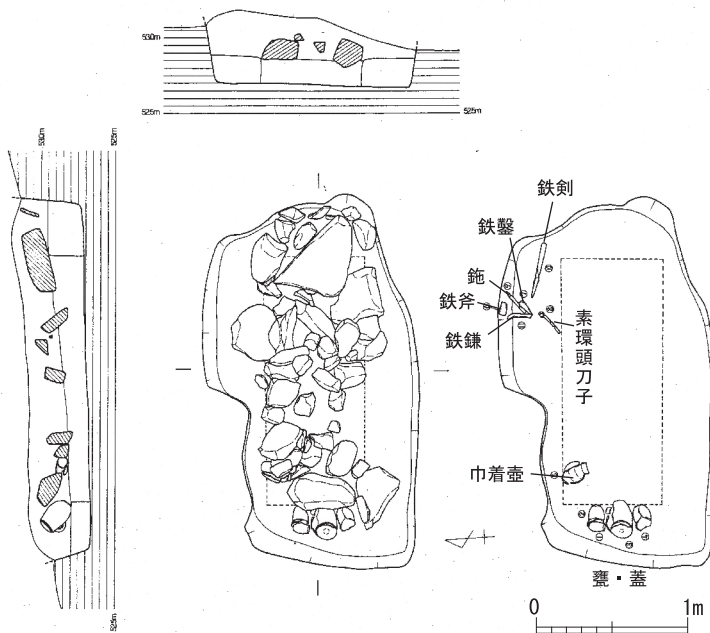
第5図 茶戸里第47号墳墓壙平面・断面図 (S=1/50)

耕作土下約20cmで墓壙の輪郭線が確認され、92-カ小区の最も南側に位置する盗掘墳である。墓壙の長軸方向は、東-西で、墓壙の規模が長さ230cm、幅98cm、深さ85cm程度の隅丸長方形木棺墓である。墓壙の中心部は既に盗掘によって底の下部まで掘られていて、東・西の両短壁だけが一部分自らの姿を整えていた。墓壙内部を地山と同じ明黄褐色腐植土が満たしていて、底には灰白色粘土が薄く敷かれていた。

遺物は大部分盗掘されているが、出土した遺物は元来の位置に埋葬した遺物の副葬状態は知ることができる。巾着壺と組合式牛角形把手付壺は、北側の長壁と墓壙壁の間の充填土内に配置してあった。鉄鉢と鉄鑿は互

いに重なって南側底に置いてあり、鉄鎌は南壁角部分の充填土で出土した。鉄鉢は鉄鉢と鉄鎌の間で各々20cm程距離を置いて副葬していた。出土した鉄器は南側長壁に隣接して

出土したが、鋒部が全部東側に向けて埋葬したであろうことが明らかになった。同様に墓壙中央部底では、形態を明らかにすることができない暗灰色の有機物が置かれており、扁球形壺(算盤玉形土器)とやや小さい川石が横に20cmの間を置いて東側に偏って出土した。



第6図 八達洞30号墳積石木棺墓壙平面・断面図 (S=1/50)



(5) 大邱八達洞 30 号積石木棺墓<sup>(注6)</sup> (翻訳)

墓壙の長軸方向が N - 85° - W で、稜線頂上部に位置しており等高線方向と交差するように造成した積石木棺墓である。墓壙の規模は長さ 240cm、幅 140cm、現在の深さ 37cm で、基板層が岩盤で形成されており、墓壙の表面形態が不規則だが、長方形に近い。遺構の上部は、自然の流出によって一部が切断されている状態である。木棺は基板層である岩盤層を掘り、底に安置していた。木棺と墓壙間の空いた空間には墓壙造成時に出た暗赤褐色砂質粘土を使用して充填していた。木棺は充填土の様相より見たとき、板材式である可能性が大きい。

土層の陥没状態で見ると、木蓋があったものと推定され、木蓋上には大小の自然石 50 余個を積石している。陥没土の攪乱で封土の存在を知ることができない。

遺物は北長壁充填土内で鉄剣、鉄斧、鉄鎌、鉄鉈、環頭刀、鉄鑿が出土して、西短壁充填土上面で甕、蓋等の土器類 6 点は出土した。西短壁から中央に若干離れた地点に巾着壺 1 点が底から 14cm 程度浮いた状態で、積石に押さえられている状態で出土した。

木棺の推定規模は、長さ 165cm、幅 67cm であって、充填土の最大高は 25cm である。

### 3. 墓制の比較

#### (1) 副葬品

##### ①副葬品目

表 1 から明らかのように、洛東江流域の原三国時代墳墓の内、茶戸里 1 号墳など最も厚葬の墓は丹後地域の最も厚葬の墓を大きく越える内容の副葬品を持つ。特に銅鏡や青銅製大型武器類、鉄鉈などは、北部九州の厚葬墓には見られるが、丹後・但馬地域では見られない。銅製武器としては僅かに銅鎌が見られるのみである。野島 永が主張するように、副葬品目に階層が現れていると捉えた場合<sup>(注7)</sup>、階層的に見て茶戸里 1 号墓などより 1 段階から 2 段階下位の階層に属す可能性がある茶戸里第 47 号墳、八達洞 30 号積石木棺墓は、ガラス玉、剣、鉈、素環頭刀子、鉄鎌といった丹後・但馬地域と共通の副葬品目を持つ。特に棒状木製品は、丹後地域初期の厚葬墓である三坂神社 3 号墓第 10 主体部<sup>(注8)</sup>と共通する点が注目される。この遺物は、文字通り棒状の木製品で、茶戸里例では削り出して把手部を作っており、全体に黒漆を塗っている。棒状鉄剣鞘や柄付タビなどと共に棺外棺側に置かれている。また、ガラス玉の副葬は、丹後・但馬地域では弥生時代後期初頭から突然普及して、装身具の主体を占める。この変化は洛東江流域の影響と見ることができる。洛東江流域の副葬品目と共通する点が多い一方で鉄鑿、鉄斧といった丹後・但馬地域では例の少ない品目も茶戸里古墳群や八達洞遺跡では副葬されており、一般的な副葬品となっている。こう

した副葬品が朝鮮半島洛東江流域の墳墓の影響とする前に列島内の状況を確認しておく、上述した通り北部九州の立岩遺跡や二塚山遺跡など、半島の影響を受けた副葬品を持つ墳墓は多い。しかし、拙稿で指摘したように、鉄製鉈の習俗としての副葬や、沓岐一哉が指摘した鉄鎌の同形同大二本組副葬<sup>(注10)</sup>は、北部九州より丹後・但馬地域が先行して始まることから、北部九州の直接的な影響を考えるのは蓋然性が低い。また、弥生時代後期前葉に限ってみれば、この二地域以外に習俗として鉄製品を副葬する地域はない。従って消去法的に洛東江流域の墳墓の影響を考えざるをえない。一方、丹後・但馬地域では、棺内に赤色顔料を頭部付近を中心に撒く行為が厚葬墓には見られるが、今回取り上げる墳墓では見られない。赤色顔料は、弥生時代中期後葉の与謝野町日吉ヶ丘遺跡S Z01<sup>(注11)</sup>でも見られ、弥生文化の墓制では一般的なものである。赤色顔料が副葬品に当たるかは議論が分かれるところであるが、棺内に置かれるものと副葬品に関しては、洛東江流域の影響が主体であるが全てではなく、一部に弥生文化の影響が見られるとすることができる。

②副葬配置

副葬品の配置状況を見ると、ここでも共通点と相違点が明らかとなる。鉄剣の副葬位置は、洛東江流域でも棺内と棺外に分か

れ、丹後・但馬地域でもその状況は同様である。棺内棺外に関わらず、被葬者の右側に被葬者と並行に置く(1AR又は2βAR・2γAR)ことは洛東江流域と丹後・但馬地域でも共通する。ガラス玉を棺内に副葬する事も共通する。一方で、拙稿で紹介した鉈

墳墓	墓域配置		本棺形式	土器供献		副葬品										その他				
	比高差(墳墓群全体)	等高線との関係等		墓域内完形土器供献	墓域内破砕土器供献	鏡	ガラス玉	棒状木製品	銅剣	鉄鉈	鉄剣	鉄鎌	素環頭刀子	ヤリ	ガリ		板	状	タビ	漆器
茶戸里1号墳		直交	朝抜き式				棺内													簪・帯鉈・銅針・銅環
茶戸里6号墳		直交	組合式(板材式)				棺内													鉄鑿・鉄斧・鉄鎌
茶戸里32号墳																				鉄鑿
茶戸里47号墳		直交	組合式(板材式)																	鉄鑿・鉄斧・鉄鎌
八達堂30号墳 石木棺墓	15~25m	直交	組合式(板材式)																	鉄鑿・鉄斧・鉄鎌
三坂神社3号墓 第1主体部	18~40m	平行	組合式				棺内					棺内								赤色顔料
大鳳呂南1号墓 第1主体部	55m	直交	朝抜き式(舟底状木棺)				棺内					棺内								赤色顔料・ガラス鋼・銅針・貝輪・ヤス
浅後谷南墳墓第1主体部	10~15m	平行	朝抜き式(舟底状木棺)				棺内													朱

第1表 洛東江流域の原三国時代墳墓と丹後地域弥生時代後期墳墓の比較



は、今回取り上げた墳墓では、丹後・但馬地域の通有の副葬配置である 1AR-h（棺内棺右側頭部付近）と共通する配置は見出されなかった。ただし、茶戸里第 32 号墳では、1AR-1（棺内棺側右側脚部付近）のものがあり、右側が意識されている可能もある。鉄鏃副葬については壱岐一哉は鉄鏃が弥生時代後期前半では「被葬者に向かって右側に入れるという規範」が存在するとし、時期が下がるにつれてそれが弛緩するとした。壱岐の指摘する規範は筆者の言う 1AL-h または 1AL-b、1AL-c のいずれかに属している。素環頭刀子も丹後の三坂神社 3 号墓第 10 主体部のように棺内に副葬されるものはなかった。

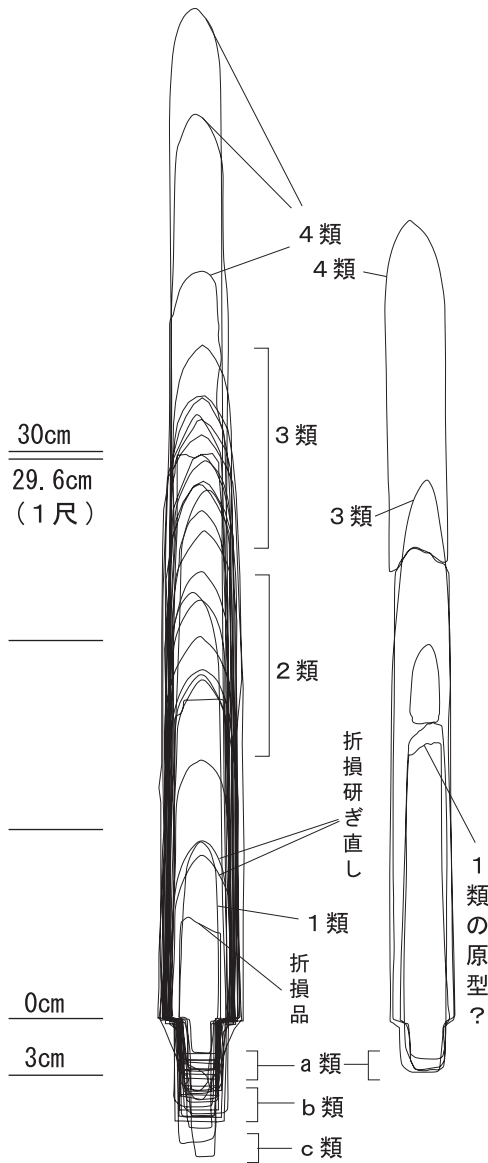
なお、高久健二は、弁・辰韓墳墓における副葬品配置の検討から、木棺内に玉類・短剣、充填土（裏込め土）内に鉄銚・土器類を副葬するパターンが確立するとしている。<sup>(注12)</sup> 高久の副葬配置の分類は、観察者が埋葬施設に向かったの左右であるため筆者とは表現が反対となるが、高久の長壁左側は筆者の 2βAR または 2γAR、長壁右側が筆者の 2βAL または 2γAL にあたる。高久が提示しているグラフからは弁・辰韓Ⅲ期の鉄剣副葬には、棺内副葬に加え、長壁左側（2βAR・2γAR）が少数例存在することが読み取れる。鉄剣を副葬する際、被葬者の右側が意識されていたことを示す可能性が有る。鉄鏃について高久のグラフからは弁・辰韓Ⅲ期の慶北では棺内と長壁左側（2βAR・2γAR）が卓越し、慶南では棺内・長壁左側の例もあるが、長壁右側（2βAL・2γAL）が卓越し、対比的な状況が読み取れる。また、弁・辰韓Ⅳ期では棺内と槲内長壁右側、長壁右側（2βAL・2γAL）が卓越する。さらに弁・辰韓Ⅴ期の慶南では木槲上部に鉄鏃・鉄銚・農工具が副葬される例があり、農工具が封土から出土した例もある。壱岐が指摘する所の鉄鏃の配置の規範が弛緩するという状況は、高久が提示したデータと整合的である。高久と同様に嶺南地域の墳墓について検討した李 清圭は鉄剣の副葬配置について、「木棺内のだいたい右側に置かれる」（1AR-h・b・c・1）とした。<sup>(注13)</sup> また鉄鏃については「矢筒に入れられ充填土に埋納されるのが大部分」であり、「1/3 程度が左側中央」（2βγAL）にあるとされる。鉈は鑿とセットで左側の充填土上段に相当数が配置される（2βAL-h・1）という。なお、李の提示したデータでは鉈が棺内に副葬される事例も多く、むしろ 2βAL-1 の配置に集中すること以外は規則性に乏しいように見える。こうした朝鮮半島南部の墓制に関する先行研究との対比からも、鉄剣・鉄鏃の副葬配置には丹後・但馬地域の副葬品配置と共通性が高く、鉈は共通性が低いことが読み取れる。

### ③副葬品の形状

#### ア 鉄剣

第 7 図に丹後地域で副葬されていた鉄剣の主要なものを関部を基準に重ね合わせたもの

と、茶戸里古墳群・八達洞遺跡出土の鉄剣を重ね合わせとものを並べて示した。既に拙稿で指摘したように、丹後地域の鉄剣はその長さから剣身部4類、茎部3類



- |         |         |
|---------|---------|
| 大風呂南1号墓 | 茶戸里1号墳  |
| 古天王5号墓  | 茶戸里32号墳 |
| 金谷1号墓   | 茶戸里51号墳 |
| 浅後谷南墳墓  | 八達洞30号墳 |
| 帯城墳墓群   | 八達洞31号墳 |

第7図 丹後地域弥生墳墓出土鉄剣と  
洛東江流域原三国時代墳墓出土鉄剣比較図

に分類し、茎部は更に形態から2分でき<sup>(注14)</sup>る。それを踏まえて洛東江流域原三国時代墳墓に副葬された鉄剣を比較すると、剣身では3類と4類が類似し、茎ではa類の長方形が類似する。八達洞第31号墳出土の鉄剣は剣身の幅は丹後の1類と同じであるが、長さが丹後地域の2類と同等となり、違いがある。拙稿では剣身の幅が2・3類と同様で、極端に短いものを3類や2類の鉄剣が折損したものを研ぎ直した可能性が有るものを指摘したが、1類としたものは実はこうした細長い鉄剣の折損したものの再用品なのかもしれない。相違点としては、丹後の鉄剣は直角関で、茶戸里古墳群・八達洞遺跡出土のものは斜関である点がある。ただし、金海良洞里162号出土の鉄剣は直角関である<sup>(注15)</sup>。この関部の形状が直角関であることと刃関双孔、そして身部横断面が鑄をもたない凸レンズ状を示すことは丹後・但馬地域の鉄剣の特徴であるが、刃部付近の形状と刃関双孔については野島 永の主張する地域毎の拵えの違い<sup>(注16)</sup>、または豊島直博・会下和宏が指摘するように消費地による改造や再流通に起因する可能性が高い。

国内での鉄器生産について、従来は舶載を中心とする見方が優勢であったが<sup>(注19)</sup>、村上恭通は小型の貧弱な短剣は東国を含む国内産とした<sup>(注20)</sup>。さらに杉山和徳は日本

出土鉄剣と朝鮮半島出土鉄剣を比較し、杉山の朝鮮半島Ⅰ型短剣を舶載したものが日本列島日本列島Ⅰ型短剣であり、日本列島Ⅱ型短剣は日本で国内外の間接的な影響を受けて創出されたとした<sup>(注21)</sup>。一方長家 伸は弥生時代中期から後期初頭の鍛冶遺構とされる遺構に椀形滓、羽口が伴わず、還元面も見られないことなどから、赤井手・仁王手遺跡以外での高温操業・鍛打による整形には懐疑的である<sup>(注22)</sup>。また、後期前半から終末では、須玖唐梨遺跡・二子塚遺跡などで椀形滓、鍛造剥片、粒状滓などが見られ、岡山の津寺一軒屋遺跡では弱い還元状態が認められるなど比較的高温の操業を伺わせる兆候があるとする。丹後地域では弥生時代後期の鍛冶遺構は現在の所認められない。したがって剣身そのものを丹後・但馬地域で製作したとするよりは、他地域からの搬入品である剣に、奈具谷遺跡出土の中期剣把から伺える丹後・但馬地域での拵えに合わせた改造を行っていたとする方が蓋然性が高い。

### イ 鉄鏃

丹後地域鉄鏃の形態は、無茎式が主体であり、一部に柳葉式が含まれる。沓岐一哉が前述の論文で朝鮮半島の事例を紹介し、丹後地域の鉄鏃との形態の類似性を指摘している。但馬地域では瀬戸谷皓、谷本由美・宮村良雄が弥生墳墓出土の鉄鏃を集成して形状の特徴をまとめている<sup>(注23)</sup>が、丹後地域とほぼ同じ状況である。

### ウ 鉈

一方鉈の形状は洛東江流域のものとは異なる。洛東江流域の鉈は柄の部分に裏スキがある断面三日月形のものであるが、丹後・但馬地域の鉈の柄は断面長方形のものであり、明らかな国産品である。ただし、但馬地域の東山墳墓群から出土した1点のみ柄に裏スキのある断面三日月形のものである。これは北部九州産又は半島産である。

### (2) 土器供献

丹後地域の土器供献については、肥後弘幸の検討<sup>(注24)</sup>、松尾奈緒子の検討がある<sup>(注25)</sup>。但馬地域では松井敬代の検討<sup>(注26)</sup>、宮村良雄の検討がある<sup>(注27)</sup>。いずれも木棺の裏込め土上または棺蓋上を含めた全体に破碎した土器片を置く行為である墓壙内破碎土器供献を主とし、次第に墓壙上供献と併用されるようになるとする。松尾は当初墓壙上供献は階層が低い主体部から採用され、赤坂今井墳墓<sup>(注28)</sup>に至って最高位の階層の中心主体部に採用されるようになるとした。肥後は墓壙内破碎土器供献が足下側に集中すると指摘している。

高久健二は先述の論文で、巾着壺が充填土内左側（2γAR）に集中し、牛角形把手付壺が充填土内下側（2γB-1）に集中するという。特に弥生時代後期前半に平行すると見られる弁・辰韓Ⅲ期ではその他の器種も加わり、充填土内下側（2γB-1）に副葬される。丹後・但馬地域と比較して明らかな共通性は土器が下半身側に集中して置かれるこ

とである。一方で朝鮮半島では完形の土器を充填土内に置くのに対し、丹後・但馬地域では土器を破碎して裏込め土上に置くという違いが見られる。

土器を破碎して置くという行為は、瀬戸内東部から近畿の弥生墓制の中で中心的な役割を占める方形周溝墓の溝内で行われることがある。吉田秀則・藤井 整は方形周溝墓に見られる供献行為を台状部上に並べられるもの、溝内に置かれるもの、破碎された土器を溝内に置くものに分類した<sup>(注29)</sup>。丹後地域では卓状墓が築造されるようになる弥生時代後期初頭に先行して弥生時代中期後葉の奈具墳墓群で、丘陵上の方形周溝墓埋葬施設から墓壙内破碎土器供献が検出されている。こうした事例から、墓壙内破碎土器供献は瀬戸内東部から近畿中央部の方形周溝墓が分布する地域で主として周溝内で行われていた破碎土器供献が丹後地域に伝播し、朝鮮半島からの土器を配置する位置の情報と融合して墓壙内で継続的に実施されるようになったとみられる。

また、丹後地域では、松尾が指摘するように弥生時代後期の後半期に完形土器を供献する事例が見られるようになる。古天王式段階の大山墳墓群周辺第14主体で小型の壺、古天王5号墓第3・5主体部で甕を裏込め土上に横倒しにして置いていた。また、西谷式の帯城墳墓群A支群7号墓第2主体部でも完形の甕を横倒しにして置いていた<sup>(注31)</sup>。浅後谷式の赤坂今井墳墓第3埋葬でも二段墓壙の上段に完形の甕を横倒しにして置いていた。朝鮮半島洛東江流域の副葬土器は原則的に完形品であり、多くは墓壙と木棺の間の墓壙底に置かれ、充填土によって埋め殺しにされる。裏込め土の上か中か、正位に置くか横位に置くかという相違はあるが、完形土器を墓壙内の墓壙壁と木棺の間に置くという行為は共通する。

丹後・但馬地域の供献土器の器種は、肥後、松井によると甕が主体で、次いで壺、高坏、鉢と続く。洛東江流域の副葬土器は巾着壺と呼ばれる小型の壺と牛角形把手付壺・短頸壺を主体としている。組成の主体が甕か壺かで大きく相違するが、高野陽子は把手付小型壺Aについて、朝鮮半島南東部地域の巾着壺からの影響を指摘している<sup>(注32)</sup>。

### (3) 木棺

丹後・但馬地域の弥生時代後期の主体部に納められる棺は原則的に組合せ式箱形木棺である。石崎善久は後期後半に中心主体部を中心に刳り貫き式の木棺が導入されることを指摘し、その形状から舟底状木棺と命名した<sup>(注33)</sup>。石崎は茶戸里1号墳の事例を引き、こうした刳り貫き式木棺の導入は朝鮮半島からの影響である可能性を指摘した。

### (4) 墓壙の立地

丹後・但馬地域の弥生時代後期墓制が確立する前段階、高久の弁・辰韓Ⅱ期の茶戸里古墳群は、平地に近い台地または河岸段丘上に立地するが、後続する八達洞遺跡は比高差15～25mの丘陵尾根上、斜面上に立地し、等高線に対して直交して築かれる。下袋古墳

群や、良洞里古墳群でも同様の立地を示す。丹後地域の日吉ヶ丘遺跡や寺岡遺跡<sup>(注34)</sup>など、貼り石方形墳丘墓を含む弥生時代中期後葉の墳墓は多くが河岸段丘上に立地し、奈良岡遺跡群の方形周溝墓<sup>(注35)</sup>と貼り石方形墳丘墓<sup>(注36)</sup>、小池古墳群の貼り石方形墳丘墓のみが丘陵上に築かれる。一見洛東江流域の墳墓と立地が類似するように見えるが、丹後地域の弥生時代後期墳墓は墓壙の主軸を等高線に平行に築くことを原則とする。ここでも共通点と相違点があることが分かる。

#### 4. 影響の実態—まとめにかえて—

これまで見てきたように、丹後・但馬地域の弥生時代後期墓制と朝鮮半島洛東江流域の墓制には、共通点と相違点があることが明らかとなった。共通点を積極的に評価すれば、丹後・但馬地域に洛東江流域の墓制が大きな影響を与えたと言える。しかし、相違点も少なくない。では丹後・但馬地域の墓制にどのような影響があったと見るべきだろうか。

外来系土器の研究においては、大きく3段階に分けて語られることがある。つまり搬入土器、外来系の製作者が在地の胎土で製作した土器、在地の製作者が、搬入土器や外来系製作者が作る土器を模倣した土器の3段階である。これに倣って検討することとする。

墓は土器のような動産ではないので、搬入の墓というものは存在し得ないが、外来系の人、その故地の文物を持ち込み、故地の葬法に従って築いた墓を外来系墓1段階とする。外来系の人、在地の文物を使って故地の葬法で埋葬したものを外来系墓2段階とする。在地の人、在地の文物を使って、外来系の人から得た情報に基づいて築いた墓を外来系墓3段階とする。

丹後・但馬地域の弥生時代後期墓制は、洛東江流域の墳墓と共通点があるものの、明らかに原則を外れた行為がある。副葬品目では、洛東江流域で一般的な鉄斧、鉄鑿が排除されている。更に土器供献は、裏込め土の中に完形のまま入れることが原則であるにも関わらず、裏込め土上に破碎して置いている。墓壙の主軸を等高線に対して直交して配置するという原則も守られない。したがって外来系墓1段階ではありえない。また、副葬品に在地産の鉄製品を使用していることからそれは首肯される。外来系墓2段階とするにも、在地の鉄製品を用いてはいるが、葬法が守られてはいない。従って外来系2段階とするのも困難である。こうした検討から、消去法的に丹後・但馬地域の弥生時代後期墓制は、外来系墓3段階、在地の人が、外来系の人から得た情報に基づいて築いた墓と考えるのが穏当であろう。丹後・但馬地域の墓制を見ると、外来系の墓制に関する情報の内、いくつかの点で相違があることは既に見てきた通りだが、造墓主体が在地の人である以上、その取捨選択が丹後・但馬地域の人によって行われたことは明白である。その取捨選択によって



成立した墓制が急速に普及し、東部瀬戸内から畿内地域を中心とした方形周溝墓や、山陰の影響で成立する貼り石方形墳丘墓を駆逐することで丹後・但馬地域の弥生時代後期の墓制は開始されるということが出来る。

しかし、今回取り上げた洛東江流域の墓制の影響は、弥生時代後期初頭に一斉に取り入れられたわけではない。また、墓壙内破碎土器供献への影響のように、弥生時代中期後葉に既に丹後・但馬地域に入っていた情報もある。洛東江流域の墓制の影響が現れた順に整理すると次のようになる。

- ①弥生時代中期後葉：墓壙内の木棺と墓壙壁の間、足下寄りに土器を置く行為。
- ②弥生時代後期初頭：丘陵上に墓壙を配置する。カリガラスの玉類・鉄鏃・鉞、上位階層の被葬者には素環頭刀子・漆塗棒状木製品を棺内に置く行為。この際、鉄鏃は被葬者の左側に置く原則。巾着壺の形態。
- ③弥生時代後期中葉：上位階層の被葬者は刳り貫き式木棺に埋葬する原則。上位階層の被葬者を中心に、鉄剣を棺内又は棺外に副葬する原則。その際、被葬者の右側に置く原則。墓壙内に置く土器は完形であること。
- ④弥生時代後期後葉：鉄鏃・鉞の副葬配置の多様化。

こうした各段階の影響はどのようにもたらされたのか。直接的な通行関係が恒常的であったとするには当時の船舶は準構造船であり、実験船での航海からも外洋を往来する沖乗り航法に用いるには貧弱であることが分かっている。では浦伝いに行く方法である地乗り航法かと言えば、墓制においても、住居形態においても排除関係にある山陰地域を通って行くのが安全かと言えばそうとも言えない。

平成24年に北朝鮮からの木造小型船が漂着した事件は記憶に新しいが、日本海沿岸には北朝鮮・韓国から小船が漂着することが多い。その中には木造船も多い。船に限らず日本海沿岸には朝鮮半島から多数の漂着物が毎年打ち上げられる。洛東江河口部から出航したが、北西からの風に流されて漂着する船がこの時期多かったのではないか。その背景として、前漢の滅亡、新の建国と滅亡、後漢の成立といった中国の政治・軍事的変動に伴い、楽浪郡では王調による楽浪郡の独立・後漢光武帝による王調の滅亡、楽浪郡の回復、楽浪郡の嶺東7郡の放棄といったことが相次いで西暦8年から30年の間に勃興する。こうした東アジアの政治・軍事的な変動の中で密かに国を離れざるを得なかった人々も多かったのではないかと推測している。交流が恒常的ではなかったからこそ、欠損した剣を研ぎ直したり、あるいは折れたまま副葬したのではないかとと思われるのである。

(ふくしま・たかゆき＝京都府教育庁指導部文化財保護課主査)



- 注1 福島孝行「弥生墳墓における鍬の副葬作法について(2)」(『京都府埋蔵文化財情報』第81号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注2 李健茂ほか 監訳西谷正『義昌茶戸里遺蹟発掘進展報告日本語篇』しこうしゃ 1990
- 注3 前掲注2
- 注4 李健茂ほか「昌原茶戸里遺蹟発掘進展報告Ⅲ」(『考古学誌』5輯)1993
- 注5 前掲注4
- 注6 嶺南文化財研究院『大邱八達洞遺蹟Ⅰ』2000
- 注7 野島永・高野陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)」(『京都府埋蔵文化財情報』第76号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2000
- 注8 今田昇一ほか『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』(大宮町文化財調査報告書 第14集 大宮町教育委員会) 1998
- 注9 福島孝行「弥生墳墓における鍬の副葬作法について(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注10 壺岐一哉「鉄鍬副葬についての一考察 - 丹後地域を中心に -」(『考古学に学ぶ(Ⅱ)』同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会)2003  
壺岐一哉「弥生時代鉄鍬副葬の展開とその特質」(『古代学研究』167 古代学研究会) 2004
- 注11 加藤晴彦ほか『日吉ヶ丘遺跡』(加悦町文化財調査報告 第33集 加悦町教育委員会) 2005
- 注12 高久健二「楽浪郡と弁・辰韓の墓制 - 副葬品の組成と配置の分析を中心に -」(『考古学から見た弁・辰韓と倭』九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会)2000
- 注13 李清圭「細形銅剣時代の嶺南地域墓制」(訳:井上主税『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会第5回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会) 2002
- 注14 福島孝行「弥生墳墓における鉄剣の副葬(1) 丹後地域」(『考古学に学ぶ(Ⅲ)』同志社大学考古学シリーズⅨ 同志社大学考古学シリーズ刊行会)2007
- 注15 東義大学校博物館・大阪朝鮮考古学研究会『金海良洞里古墳文化(日本語版)』(東義大学校博物館学術叢書7) 2001
- 注16 野島 永「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって」(『河瀬正利先生退官記念論文集 考古論集』)2004
- 注17 豊島直博「弥生時代の鹿角装鉄剣」(『東国史論』第18号 群馬考古学研究会)2003
- 注18 会下和宏「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」(『日本考古学』第23号 日本考古学協会)2007
- 注19 潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』(吉川弘文館)1982
- 注20 村上恭通「日本海沿岸地域における鉄の消費形態 - 弥生時代後期を中心として -」(『古代文化』第53巻第4号 財団法人古代学協会)2001
- 注21 杉山和徳「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」(『考古学研究』第61巻第4号 考古学研究会) 2015
- 注22 長家伸「弥生時代の鍛冶技術について」(『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会第5回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会) 2002
- 注23 瀬戸谷皓「但馬出土の鉄鍬について(1)~(3)」(『但馬考古学』第5・6・9集 但馬考

- 古学研究会)1988・1991・1995  
谷本由美・宮村良雄「豊岡市域弥生墳墓群副葬の鉄製品」(『但馬考古学』第10集 但馬考古学研究会)1998
- 注24 肥後弘幸「墓壇内破碎土器供献(上)・(下) - 近畿北部弥生墳墓土器供献の様相 -」(『みずほ』第12・13号 大和弥生文化の会)1994  
肥後弘幸「弥生墳墓における土器供献 - 丹後の場合 -」(『Y A Y !』弥生土器を語る会 20回 到達記念論文集 弥生土器を語る会)1996
- 注25 松尾奈緒子「丹後地域における土器供献の採用状況 - 弥生時代後期を中心に -」(『入谷西A-20号墳発掘調査報告書 - A-11・12号墳試掘調査 -』奈良女子大学考古学研究報告 3 奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化専攻文化史論講座)2005
- 注26 松井敬代「破碎土器の埋納について - 豊岡市神美地域を中心として -」(『但馬考古学』第6集 但馬考古学研究会)1991
- 注27 宮村良雄「豊岡の弥生墓と墓壇内破碎土器供献」(『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市文化財調査報告書 第26集 豊岡市教育委員会)1992
- 注28 岡林峰夫ほか『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町埋蔵文化財調査報告書 第24集 2004
- 注29 吉田秀則「滋賀県下の方形周溝墓の”供献土器”について」(『紀要』第3号 財団法人滋賀県文化財保護協会)1990  
藤井 整「方形周溝墓調査の課題と方法」(『みずほ』第41号 大和弥生文化の会)2009
- 注30 常磐井智行ほか『丹後大山墳墓群』(丹後町文化財調査報告 第1集 丹後町教育委員会)
- 注31 岡田晃治ほか『帯城墳墓群Ⅱ』(『埋蔵文化財発掘調査概報 1987』京都府教育委員会)1987
- 注32 野島永・高野陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(3)」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2002
- 注33 石崎善久「弥生墳墓の構造と変遷 - 舟底状木棺を中心として -」(『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学・別冊10 雄山閣)2000  
石崎善久「舟底状木棺考」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注34 奥村清一郎ほか『寺岡遺跡』(野田川町文化財調査報告 第2集 野田川町教育委員会)1988
- 注35 川西宏幸ほか『奈具遺跡発掘調査報告書』(財団法人古代学協会) 1985  
河野一隆「奈具墳墓群・奈具古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注36 奥村清一郎ほか『奈具遺跡第3次発掘調査報告書』(弥栄町文化財調査報告 第4集 弥栄町教育委員会) 1986
- 注37 植山 茂『小池古墳群』(大宮町文化財調査報告 第3集 大宮町教育委員会・財団法人古代学協会・平安博物館) 1984
- 補注  
文中の土器編年は高野陽子「丹後地域 - 擬凹線文土器の様式と変遷 -」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター 2006による。